

「教会の光と闇と」

使徒の働き 4章32節～5章11節



約束された聖霊が降られ宣教の働きが始まりましたが、そこには迫害のように外からの困難もあれば、自分たちの内なる罪や古い性質との闘いもありました。初代教会においても、「一人も乏しい者がいない」というような愛の交わりがありながら、同時に今の私たちとも変わらない人間の罪の問題があったことがわかります。私たちが何をするかは大切なことですが、私たちがどのような存在であるかということはそれ以上に大切なことです。

① 自分にも闇の部分があることに、誠実な態度でいたい

“さて、信じた大勢の人々は心と思いを一つにして、だれ一人自分が所有しているものを自分のものと言わず、すべてを共有していた。…彼らの中には、一人も乏しい者がいなかった。” 4:32-

“ところが、アナニアという人は、妻のサッピラとともに土地を売り、妻も承知のうえで、代金の一部を自分のために取っておき、一部だけを持って来て、使徒たちの足もとに置いた。…ペテロは彼女に言った。「あなたがたは地所をこの値段で売ったのか。私に言いなさい。」彼女は「はい、その値段です」と言った。” 5:1-2,8

② 大きな祝福を受けながらも、神を欺く人間の思い違い

“すると、ペテロは言った。「アナニア。なぜあなたはサタンに心を奪われて聖霊を欺き、地所の代金の一部を自分のために取っておいたのか。売らないでなければ、あなたのものであり、買った後でも、あなたの自由になったではないか。どうして、このようなことを企んだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」” 5:3-4

“思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。” ガラテヤ 6:7

③ 神を欺くことは、教会の交わりを壊すことでもある

“そして、教会全体とこのことを聞いたすべての人たちに、大きな恐れが生じた。” 11

“あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。もし、だれかが神の宮を壊すなら、神がその人を滅ぼされます。神の宮は聖なるものだからです。あなたがたは、その宮です。” 1コリント 3:16-

【考えてみよう】

- ・厳しすぎるとしか思えないような結末です。しかしそのようなできごとを、ルカはなぜそのまま記したのでしょうか。教会の記録にこのようなできごとが記される意味はどこにあるのでしょうか。